

---

# **物理魔女の記録**

宗像竜子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

物理魔女の記録

### 【Zコード】

Z6498P

### 【作者名】

宗像竜子

### 【あらすじ】

MMORPG『RED STONE』のキャラなりきりブログ「物理魔女の記録」で公開していたおまけ小話を集めたものです。通常の小説の書き方とは違いますので、作品を読む前に必ず「初めにお読みください」をご覧下さい。

## 初めにお読みください

「Jちゃんは「みてみん」に画像移行中のMMORPG『Redstone』の非公式プレイブログ「物理魔女の記録」より、画像に付随して書いていた小話の転載となります。

全ての画像に対し小話をつけていた訳でもなく、全てその場で即興で書いたものという事もあり（推敲なし）、時間軸などが超い加減です（リアルの年中行事に関連しているものもある為）。

元々そうした事を目的としたブログでもなかつたので、基本的に未プレイの方にはわかりづらい作品となつています。

また、ブログがキャラなりきり形式だった為、個性を出す演出で通常記事に使っていた固有顔文字が作中にも使われています。ご了承ください。

父（Bis / 天使）・母（知識魔女）は生死不明、四人は訳あってそれぞれバラバラの場所で育つて、最近になつて再会 四人揃つて暮らすようになった、というオリジナル設定です。

「一次小説のようなんですか、今まで一次を書いた事かなかった事もあり、ちゃんと一次になつてているのかは怪しいです（笑）

なお、宗像はマイナー職・スキルが大好きなのであまり王道ではないキャラが多いです（物理魔女は現在だと最終形態に近いようですが、当時はやる人も少ないマイナー職でした）。

職業などの詳細は公式様 (<http://www.member.s-n-e.com>) をご参照下さい。

II II II II II II II II II II

簡単なうちの子設定

<長女・サナティーラ／物理リトル>

・18歳

- ・四人の中では料理が一番上手
- ・弱冠泣き上戸の氣があるらしい
- ・外見も性格も母似
- ・マゾい職の為か、意外とシビアで苦労性で個性の強い妹達に翻弄されがち
- ・実は力ナヅチ（泳げない）
- ・固定顔文字は「(・ワ・)」

物理魔女：物理系攻撃をメインスキルにするリトルウイッチ

<次女・ルイトルード／GPマジアチャ>

・17歳

- ・実は結構シスコン（だが愛情の方向が何処か違う方向を向いている）
- ・顔色は全く変わらないがすさまじい下戸（突然バタリと行く）
- ・外見も性格も父似
- ・ボケなのか本気なのかわからぬ言動で、サナによくツッコミをもらう
- ・固定顔文字は「(・ー・)」

GPマジアチャ：GP<ガーディアンポスト>をメインスキルにする知識アーチャー

<三女・チエナ／魚鳥サマナー>

・15歳

- ・ペツトの山葵（わさび／ゴートマン／ユウ）が大好き
- ・旅先で珍しい物を見つけるとお土産に持つて帰つてくる
- ・外見は父似、中身は母似

- ・おとぼけと見せかけて、割と毒舌
- ・固定顔文字は「（。。\*）」

魚鳥サマナー：四属性の召喚獣の内、メインをスウェルファー（水）サブをワインティー（風）とするサマナー

〈四女・ルフェルトナノボトル姫〉

・13歳

- ・露天商の為、四人の家計のやり繩り担当
- ・末っ子なのに多分一番しつかり者
- ・しつかりしているばかりに姉達がボケ属性ばかりのせいか、たいでいツツコミ担当
- ・外見は母似、中身は父似
- ・プリンセスだからか何故か姫言葉を使用
- ・姫なので顔文字なんて使いません（笑）

ボトル姫：ボトル投げをメインスキルにするプリンセス

初めてお読みください（後書き）

Copyright ? 2010 L&K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.  
License to GameOn Co., Ltd.

**露天商・ルー。（前書き）**

今日も四女は露店をするようです。

## 露天商・ルー。

夕暮れ迫る古都ブルンネンシユテイグ。

ルフェルトナは露店を広げつつ、ため息をついた。

（はあ…今日も売れ行きが思わしくありませんでしたわ…）

姉妹がそれぞれ拾つてきたものを売りさばくのは、大抵四女のルフェルトナの役目だつた。

長女のサンティーラは少しでも稼ぎを増やそうとレベル上げに血道をあげているし、次女のリトルードはマイペースに生きているのでやはり滅多に家に帰らない。

三女のチエナは先日遙か東にあるバリアートまで遠征に出かけると言つたきりまだ戻つて来ないし、結局今日も留守を守るのは古都が拠点のルフェルトナになるのだつた。

本人としては上の姉達のように何処かに出かけて狩りをしたりしたいのだが、誰かがアイテムを管理しなければ銀行はパンクし、貯金も増えない。

（本当に困つた方々ですわ）

信頼されているのだとと思うが、もつ少し考えて欲しいと常々思う。

（何でも拾つたものを銀行に入れておけばいいってもんじゃありませんことよー）

過去に何度も説教したのに、銀行に空きが出来たかと思うとアイテムを突つ込む事を止めない。

それでも根が真面目なルフェルトナはそのまま換金も出来ず、頬を膨らませながらも露店を開いて姉達が拾つてきた物を並べるのだった。

人通りも少なくなつてきた。かくなる上は最終手段だ。

「うつ…しくしく…」

必殺・嘘泣き。嘘とは言つてもその演技は迫真のもので、何事か

と人の足が止まる。

(…今ですわ…!)

「…」ゾドばかりにルフェルトナは潤んだ瞳を持ち上げ、震える声を紡いだ。

「売れない」と家に帰れませんの…。ぐすつ…買つて下さらない…?」

「うして、四姉妹の家計は僅かながら潤つたのだった。

♪ 115505 | 1458 ♪

注：RSに朝夜はあつません。ちなみに「嘘泣き」はプリンセスのスキル名です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「まったく…毎回苦労しますのよ。少しあは感謝して下さるませ」

「……う、うん(=ワ=)。○(泣き落とし…?)」

「わかつたわ…たまには戻るわよ(・ー・)。○(泣き落としね…)

「ルー、偉い偉い(。 。 \* )。○(嘘泣きなんだ…)

**露天商・ルート（後書き）**

<『物理魔女の記録』より転載>  
Copyright ? 2010 L&K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.  
License to GameOn Co., Ltd.

## 物理魔女になつた理由。（前書き）

四姉妹の組み合わせでどうやつたら無理のない家族構成になるかを妄想した小話です。

## 物理魔女になつた理由。

古都ブルンネンシユティイグから遠く離れた場所 ドレム川流域。

その河口の一つにある、”ド”と呼ばれるダンジヨンにサナティーラは来ていた。

手にするはその細腕と比べるとこなさがござい感じが否めない少し古びたホール。それを慣れた手捌きでぐるりと回し、天に掲げると鋭く叫ぶ。

「ウルトラノヴァ！」

すると、頭上を覆つていてるじつじつと荒い筋肌を見せる筋盤は何処へやら、無数の光が薄暗い闇を切り裂いてサナティーラが指示示す場所に降り注いだ！

そこにいたのは、死した後それでもこの世に留まり続ける哀れなモンスター アンデッド達だつた。

光の属性を帯びたそれは、この世ならぬ何処から召喚された星の欠片。

一体どんな威力を帯びていたのか、その光を浴びたアンデッド達はその能力を低下させられている。だが、その光の激しさとは裏腹に、ダメージはほとんど与えられていなかつた。

最初から低下のみが目的だとは言え、サナティーラは少し落ち込んだ。

サナティーラの職業はリトルウィッチ 特殊な歌の力で能力を上げ、異界の星を呼ぶ者。故に、この世界では時として異能者、あるいは異端者として扱われる事もある。

それでもサナティーラはこの職業を誇りに思つていた。

何故なら彼女の母も、やはり同じリトルウィッチだつたからだ。

ただし 同じと言つても、母は魔力が高く、同じウルトラノヴァでも低下のみならず攻撃魔法として使う事も出来たのだが。

『サナちゃん、なんでお母さんみたいに雷バリバリーってやらないの一?』

ある時、妹のチエナからそんな事を尋ねられた事がある。

一般的にリトルウイッチは母のように魔力を武器とするものが多い為、その疑問も当然と言えば当然とも言えた。

その時はなんと答えたのだつたか……。

そんな事を思い返す間に、ウルトラノヴァによつて能力を下げられたモンスターが向かつて来る。

サナティーラはホールを構え直すと、一番手前にいるモンスターに向かつてホールを一閃させた。空振りと思いきや、そこから人の頭ほどの光が軌跡を描きながらモンスターへと飛ぶ。

> i 1 5 6 3 0 — 1 4 5 8 <

星が弾け、衝撃でモンスターがよろめいた。

コメットシユーティング。

異界の星を召喚し、魔法ではなく弾丸のように打ち出すリトルウイッチのスキル。

ウルトラノヴァを放つ前に、自らにかけた幸運の星　　スター　　ライトによつて上昇した運は、その一撃を時にさらに強力なものにする。

こちらは先程のウルトラノヴァとは違い、確実なダメージを相手に与えていた。通常の一倍、時として四倍に膨れ上がつたその攻撃により、次々にアンデッドは消滅してゆく。

サナティーラのように物理攻撃を得手とするリトルウイッチはあまり多くはない。それでもその道を進んだのは。

(…ああ、そうだった)

手にした神の祝福を持つホールには、アンデッドを浄化する力が秘められており、それによる攻撃は通常の攻撃よりもより強力だ。

… それはかつて、父であつた人が持つていたもの。

それが自分でも使える事を知った時、サンティーラは茨の道と知りながら物理の道を志したのだ。

自身にも多少のダメージを負いつつも、モンスターを倒しきる。ふと気付くと、かばんの中は換金出来そうなアイテムで埋まりかけていた。

(ふふ、これなら今晚はござりそうね)

狩りの結果に満足したサナティーラは安全な場所へと移動すると、かばんの中から帰還の巻物を取り出した。

大切な家族の待つ場所へ帰る為に

サナ「たつだいまー見てー！久々にアイテムがこんなにー！」  
！（^ワ^ノノ）

卷之三

チヨナーわーおめでとうサカヰキん！（。。\*）ノ「

「あら、いや、お、今夜はお祝いすへきですかしら?」

ルイー あまり喜ぶと次からまた出なくなるんぢやないの…（：—：）

「……それもそれで、わね（サナの事です）……」

カナ「う」

## 物理魔女になつた理由。（後書き）

<『物理魔女の記録』より転載>  
Copyright © 2010 L&K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.  
License to GameOn Co., Ltd.

セマナーの願い事。（前書き）

あるクリスマスの出来事。

## サマナーの願い事。

私の名はケルビー。火を司る神獣である。  
よく見た目で犬扱いされるが

断じて「犬」ではない。

存在する次元からして違うので、同列に見られるのは正直腹立たしいのだが、今後もその扱いは変わりそうにない。

何しろ、主であるサマナーを運ぶ際のスキル名が「ライディング・ドッグ」、すなわち「犬乗り」……。三段階になり神獣らしい姿に進化してさえ、やつぱり「犬乗り」……。

ああ、なんと嘆かわしい事だろう。

世界中に散らばる同胞達もさぞ無念の涙を流しているに違いない。  
だが、ある日の事。

そんな扱いも吹き飛ぶ悲劇的な出来事が私を襲つたのだった。

+ + +

私の主は名をチヨナというサマナーである。

サマナーにも四種全ての神獣を使役する者はほとんどおらず、大抵その中の一種を主に召喚する。私の主は普段ワインディーとスウェルファーを使役する為、私を呼ぶ時は大抵長距離を移動する時だ。  
今日もそうだと思っていたのだが、呼び出された場所は街の真ん中だった。

普段は噴水のある場所に、派手に飾り付けられた木が聳え立ち、  
その根元にはプレゼントの箱が積まれている。  
どうやら、古都ブルンネンシュティグらしい。

周囲に人がひしめき合い、基本的に常にぎやかな場所だが、今

日は随分と人が多い気がするのは気のせいだろ？が……。

しかも何だか妙にこいつ、意氣揚々と戦う気満々の雰囲気が漂っている。平和なはずの街に何が起こっているのだろう。

疑問に思つてゐる、主が声をかけてきた。

「きたきた～ 待つてたよ、ケルビ！」

主は随分と上機嫌だ：いや、不機嫌な姿の方が想像できないが：いつも増して楽しげである。

「今日はケルビにお願いがあつて呼んだの一（。。\*）」

ふむ？

「ワインディーやスウェルファーでなくて私に用があるのだろうか。  
「ワインディもスウェルファも、ヘッジャーも試したんだけど、やつぱりケルビが一番だと思ったんだよねー」

何、ヘッジャーまで呼んだのか？

それでも満足しなかつたとは、一体どんな用事なのだろう。  
期待半分、不安半分で主の行動を見守ると、何処からともなく何かを取り出したかと思えば、ずぼっと頭に被せられた。  
な、何だ！？

予想外の行動に、反応が遅れてしまう。

見かけによらず意外とすばやい主はその隙を見逃さなかつた（敏捷固定111は伊達ではないのだ）。

「おおっ！ ケルビ、似合つー（。。\*）ノ  
きゅつとあごの下辺りで紐らしきものを結ばれ、よつやく自由にされる。何だろ？…頭の上に何か乗つてくる……。

困惑する私を他所に、主は上機嫌で話を進めた。

「これからねー、パーティするんだよ サナちゃんとルーがごちそう作つてくれて、ルイちゃんがツリー取つて来てね、あたしが飾りつけしたんだー（。。\*）」

待て、ツリーとは取るものなのか……？

……いや、それはどうでもいい。一体、私が呼ばれた理由はなんなんだ？

「ツリーもあつて、骸骨までサンタにならう。なんだからトナカイもいないとね！（。。）＝3」

「どういう理屈だ？」

「こういう事で、ケルビはトナカイ役けつてーい ヽ（。。\*）ノ」

> i 1 5 7 5 3 — 1 4 5 8 <

.....。

「繰り返し言つ。私は火を司る神獸であつて、犬ではないし

トナカイでもない。

「ケルビなら赤いし完璧だよー。d（。。）＝3」

何故赤いと完璧なんだろ？

そんな事を自信満々に断言されどどいつののだ。  
だがしかし、召喚獣の悲しさ、主に命じられば従つ以外に道はないのだった……。

+ + +

「チエナ！！ 召喚獣で遊ぶじゃダメでしょー？ カわいそつじや  
ないの！（、ワ、：）」

「えー（。。）」

「えー、じゃありませんー！」

結局、主の自宅に着くと私の変わり果てた姿を見た主の姉が同情してくれた結果、比較的早くトナカイ姿から解放される事になった。  
やれやれ……助かった。

ちなみに取つてきたツリーとは、変わり果てた姿のトレントだった。

「一応、あれも神獸なのだが……。

いろいろ飾り付けられた姿にかつての面影はない。まさかこんな事になるとは彼も思わなかつた事だらう。私はそつと物陰で涙を拭つた。

姉に叱られてしばらく不満そうにしていた主だが、その内また上機嫌に戻ると私に話しかけてきた。

「ねえねえ、ケルビ。家があるって、いいねえ（。。\*）」

私は神獣なので、それがいいものかよくわからない。けれども主が幸せそうだったので、多分良いものなのだろうと思つ。

帰れる場所があるという事は、おそらくきっと。

私は目の前に置かれた肉付の骨をどう処理していいものか悩みながら、楽しげに談笑する主とその姉妹を見守つた。

だから犬じやないと何度も言えば（略）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

\* 中の人の呴き\*

別タイトル：「あるケルビーの悩み」でした（笑）

## サマナーの願い事。（後書き）

<『物理魔女の記録』より転載>  
Copyright © 2010 L&K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.  
License to GameOn Co., Ltd.

いの手でやれるものな。 (前書き)

四姉妹が生まれる前の一幕。

> . 1 1 5 8 6 3 — 1 4 5 8 <

最初の記憶は空白。

空白にも等しい、真白な世界。

そこが何処だったのか、何処にあるのか、もう思い出せない。た  
だわかる事は、もう一度とその白い場所には戻れないという事だけ  
だ。

今となつてはもうおぼろげだが  
この身は罪を犯した。だから  
あの場所から、追放されたのだ。

直接手を下した訳ではないからか、命を奪われる事はなかつたが、  
その代わり欠落し続ける記憶を抱え、いつ果てるともしれない長い  
長い時を生きる事になった。

何処から来て、何処へ行くのか。

それを考える事はおそらく無意味で、非生産的な事だ。

教会に仕える聖職者として各地を回り、時として人々を助け、神  
の教えを伝える。場合によつては自ら武器を取り、戦う事もあつた。  
悪魔とそれによつて狂わされた生き物達を倒す事は、彼に一種の  
贖罪として課された使命でもある。けれど彼等を打ち滅ぼした後に  
彼に残されるのは、いつだつて苦い虚しさばかりだった。

こんな事はしたくはない。そう思うのに、今まで延々と繰り返し  
てきたその事以外に、他にやるべき事もなければ、他に出来る事も  
思いつかない。

己の手が命を奪つほど、記憶の中の空白は遠ざかつて行くよつな  
気がする。

あの空白を忘れてしまつ事が出来たなら、こんな虚しさを感じず  
にいられるのだろうか。全てを忘れて、生きてゆく事が出来たなら  
。

そんな物思いを、何かが駆け寄つてくる軽い足音が遠ざけた。

「ビショップさまーー！ いつもモンスターがいますーー！」

田の前の茂みからぴょこりと飛び出してきたのは、一匹のうわぎだった。驚くべき事に、人語を話している。

けれど彼は眉一つ動かさずにひょいとそのうわぎを抱き上げた。「そうですか。それはありがたいですが……こぐらモンスターに気が付かれないと、危険な場所に一人で行くのは感心しませんね」

「「！」めんなさい。でもこれくらいはしないと「恩返しになりますせんものー！」

「律儀なうわぎですね…。恩返しと云つても、罠から助けてあげただけでしょ？ とにかくその分くらいは返してもらつていますよ？」「まだまだ足りません！ だって命の恩人ですもの。わたしの気が済むまで御一緒させて下さいませんか？」

「…私の旅は終わりのないものです。それでも着いて来るつもりですか？」

「じゃ、邪魔ですか…？」

恐々とうわぎが見上げて来る。保護した時から思つていたが、どうもこのうわぎはやたらと人間くさい。

出来れば元いた場所に戻した方が良いと思つただが、かと言つて人語を操るうわぎなど他の人間に見つかればどんな処遇をされる事か。

そもそも、人間の仕掛けた罠にやすやすとまつている時点での普通のうわぎより危険を察知する能力が低いような気がしてならない。

(悪魔の影響だらうか…それにしても邪魔を感じないが……)  
しばらく黙考した後、彼は小さく嘆息し、抱えていたうわぎを肩に乗せた。

「…私には戦闘能力がほとんどありますから、あなたまで守れませんよ」

「大丈夫です！　自分の身は自分でちゃんと守ります。御迷惑はおかげしません！」

「そうですか。…じゃあ、行きましょうつか」

「…　はい」

「の手にはおそらく、かつてほどの力はない。果たしてこのかよわこうさぎ一匹、守れる程の力すらあるかどうか。そう、あの時ほどは」。

(…あの時?)

思い返せば、そこには空白がある。

思い出せない場所、思い出せない記憶。取り戻したいのか、忘れないのか…それすらも曖昧で。

「ビショップさま、心配しないで下さい。わたし、こいつ見えて結構強いんですよ!」

黙り込んだ彼を誤解してか、肩に乗せたうさぎが自信満々に叫ぶ。「……。そうなんですか。それはすごいですね」

「何ですか、その棒読み。さては信じてませんね！？」

「当然でしょう。そんな事を言つ前に、罷へらい避けて通れるようになるべきでは?」

「はうつー！」

彼の遠慮のない言葉に、ついせはがくじと打ちのめされたようになだれる。

変なうさぎだ。話していると、相手がうさぎである事を忘れてしまいそうになる。…そう言えど、誰かとこんな風に他愛のない事を話したのはすぐく久し振りな事かもしれない。

「ついて来るのが嫌になりましたか?」

問いかけると、がばりと顔が上がる。

「いいえっ、まったくー！」

何処か自棄にも感じられるほどの必死で、つい彼は吹き出した。

一体何がこの「わざ」で止まらせてくれるのかわからないけれども、きっとこの「わざ」がこの限り、思考をあの空白に囚われ続ける事はないだろ。

「本当にどうなつても知りませんよ? まあ、即死さえしなけれ  
ば復活は可能ですが……」

「ジムシナガ、やひるじに事柄いとせんか……？」

「戦つて守る事は出来ませんが、死からは遠ざけられると言つてい  
るだけですよ。…私が先に死んでしまつたら意味はないんですけどね」

の声に守られるものせめてないけれど。

II II

四姉妹父と母の若干シリアス寄りの小話。

父は結構後々まで母を人語をしゃべるうさぎだと信じきていて、母は母で抱っこされたり肩に乗つたりと甘え放題だったばかりになかなか正体を言い出せなかつたという裏設定を文章化したもの。母は当然ながらうさぎ变身（姫スキル）マスターです。

いの手でやられるものな。 (後書き)

<『物理魔女の記録』より転載>  
Copyright © 2010 L&K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.  
License to GameOn Co., Ltd.

ある夏の日。（前書き）

四姉妹が海水浴に行つたようですね。

## ある夏の日。

> i 1 1 7 0 2 4 — 1 4 5 8 <

木立を抜けると一気に視界が広がった。そこにあるのは、何処までも鮮やかな青。

「わーい、海だー！！」（。。＊）ノ  
チエナの歓声が上がる。

「やつと着きましたわね！」

ふう、と額に浮かんだ汗を拭いながらも、ルフェルトナも笑顔だ。  
場所は港街ブリッジヘッドの東を流れる川、ルリリバーを超えた  
場所　　一面に広がる砂浜が美しい海岸。

普段はそれぞれで狩りに露店にと動いている姉妹だが、今日は珍しく四人揃つての遠出だ。たまには四人で海でも行こうと提案したのは、サナティーラだった。

「変な場所には入らないのよ。危険な所もあるんだから」

長女らしく、サナティーラが注意を促す。

一見平和そうだが、ここもまったくモンスターがない訳ではない。今の四人では太刀打ちできない高レベルのモンスターが潜む洞穴があるとも聞いている。

「わかつてるもーん」「  
「心配無用でしてよ！」

下二人は知つていてるどばかりに胸を張る。

まだまだ子供だが、どちらもそれなりに経験を積んだ冒険者だ。この辺りに出没するモンスターくらいなら、さほど苦労もせずに擊退するに違ひなかつた。

そんな様子を眺めつつ、ルイトルードは黙々と準備する。

普段は寝る時以外は肌身離さず身に着けている弓矢を外し、軽い皮で仕立てられた鎧を取る。元々、他の三人に比べて軽装だ。準備

はすぐに完了した。

「あつ！ ルイちゃんすい！！」

チエナが気付いた時には、すでに海に向かつて突き進んでいる所だった。

「こら、ルイー！ ちゃんと準備運動をしなさいーーー！」

背後からサナティーラの怒声が飛んでくるが軽く聞き流す。一見そうは見えなくとも、今日といつ日を楽しみにしていたのは、ルイードもなのだ。

ザッパーン！

足を踏み入れると同時に正面から波を被る。炎天下を歩いてきた肌に、海の水は心地良い。

砂浜を振り返って見れば、我もどばかりに続く妹一人と、やれやれと苦笑するサナティーラの姿が見えた。

いつもは一人でもあまり気にならない。元々単独行動が基本であるし、海だって来ようと思えばいつでも来られる。

それでも昨日の夜から樂しみだったのは、家族と一緒にだからだ。姉妹四人が揃って生活を始めて、さほど時間も経っていない。ずっとばらばらだったからこそ、共にある時間がとても貴重に感じられた。

「サナも早く来ればいいのに…」

言ひだしつべなくせに、なかなか海に入ろうとしないサナティーラの姿にぼそりと咳けば、チエナと水をかけ合っていたルフェルトナがおや、と言ひよみに手を止める。

「…もしや」

「もしや？（・ー・）」

「サナってカナヅチ…でしたかしら……？」

「え、いくらなんでもそれはないんじゃないのかなあ（。・・）」

「…」

三人の視線が自然とサナティーラに集まる。その視線にぎくりと  
サナティーラが身を強張らせた。

「な、なに？ 三人とも……（^ワ^・）」

不自然な笑顔のままじりじりと逃げ腰になると、三人が動いた  
のはほぼ同時。

「スウェルファ、行つけーーー（。。\*）ノ」

「い、いやああああーーーーー？」

「逃がしませんわ！！」

チエナが召喚した水の神獣・スウェルファーがサナティーラに  
襲いかかり、慌てて逃げようとした所をひたぎに変身したルフェル  
トナがすかさず退路を塞ぐ。

その隙に槍を手にしたルイトルードが一気に距離を詰めた。こん  
な時の為に（？）追撃用ランサースキルを習得した事は秘密である。

「ふふふふ…（・ー・+）」

「な、なな、なんでそんなに楽しそうなのよ、あんた達はーーー（  
TワTーーー）」

妹達（+召喚獣）に囮まれたサナティーラはすでに涙目だ。

「大丈夫大丈夫…痛くないから」

「何がーーー？」

「いつせ〜えのつ

「い、いや、ダメだつて、あ、ちょー！」

そのままサナティーラは、抵抗も空しく、情け容赦もない手によ  
り海へと放り投げられた。

ザツパーん！

青い海に高く水しぶきが上がる。

「ほらつ、気持ちいいでしょサナちゃんーー（。。\*）ノ」

「折角来たんですから楽しまないと損でしてよー！」  
ねー、と頷き合つ下二人。一見その光景は微笑ましい。

だが、ふとルイトルードは気付いた。当然返つてくると思つたサナティーラの怒声どころか、波音以外の音がない事に。

「…浮いてこないんだけど……（・ー・・）」

「「ー！？」

ルイトルードの言葉に呑気に構えていた二人もきょと田を見開いた。

普通、人の身体は浮くものなのだが、水しづきがあがつた辺りに確かにサナティーラらしき姿がない。

「ササササ、サナちやーん！？<（。 。 ーー）^」

「どうしましよう…お、沖に流されたりしてませんわよねー！？」

「ど、ともかく早く探さないと……（・ー・・）」

海水浴どころではなくなつた三人は慌てて長女の姿を探し始めた。

その後、スウェルファーによつて無事に沈没していたサナティーラが救出され、サナティーラがまったく泳げない事が判明した。だつたら何故海に行こうなどと言つたのか、と問われたサナティーラは涙ながらに語つたという。

「だつてだつて、家族で海水浴つて昔から憧れだつたんだものー！  
！（ツワト）  
くウワーン！」

結局これで懲りたのか、サナティーラが自分から妹達を海へ誘う事は一度となかつたという。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

舞台のイメージは「半島の海辺」マップです。

あまり狩場としては使われない場所だけど、個人的には結構好きな場所だつたりします。

なお、サナは山（スマグ）育ちという設定なので全く泳げません（笑）

ある夏の日（後書き）

<『物理魔女の記録』より転載>  
Copyright © 2010 L&K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.  
License to GameOn Co., Ltd.

## ルフェルトナの日課。（前書き）

夕暮れ前、出かけていた姉達が帰つて来ます。

## ルフホルトナの日課

（古都・ブルンネンシュテイグの一角にあるとある小さな家にて）

「ただいまー（・ワ・）」

「あら、サナ。お帰りなさい。今日も河口ダングジョンでしたわね。依頼の調子はどうでしたの？」

「……（・ワ・）」

「えつと…その、また明日がありますわ（汗）」

「そうかなあ、やうだよねえ、がんばる〜〜（つワーバウ）あわあん」

+

+

+

「…ただいま…（・ー・）」

「あやあ！？ む、お帰りなさい。ルイ…こつも歸りますけど、いきなり背後から現れるのはやめてトセーな。心臓に悪いじやありませんのー！」

「……（・目・）」

（なんですね、その不満そうな顔は）

+

+

+

「たつだいまー！…（。＊）ノ」

「お帰りなさい、チホナ。…あら、山葵シナガが抱えているのはなんですの？」

「えつとねー。今日ははねー、依頼で砂漠でサソリの殻集めしてたの」

（。＊）ノ

（…嫌な予感）

「でね、サソリってHビに似てるなーと思つたからいくつか持つて帰つてきてみた（。。\*）＼食べられる?」

「つて、まだ生きてるじやあつませんのー!ー!」

+ + +

…はあ、本当にわたくしの姉達は困つた方ばかりですわ。  
しかも揃いもそろつてボケばかり…!!

毎回ツツコむのも大変ですよ…つ。

少しばは迎える側にもなつてみたらいいんですね…!!

「ルー、ジ飯よー（・ワ・）」

「今日もよく働いたわ…（・ー・）＼グルキュー」

「もうサソリいないから大丈夫よー? バ（。。\*）ノ

「はいはい…あら、このお花はなんですか?」

「あ、きれいでしょー（・ワ・\*）」

「ええ、とても素敵ですね」

「夕御飯の買い出しの時に見かけてね。ルー、お花好きでしょ?  
だから買つてきたの」

「え…つ、わ、わたくしのため、ヒ?」

「いつもお留守番してくれてるからたまにはね!（^ワ^）」

「サン…わたしには…?（・ー・）つ」

「あんたはいつも好き勝手やつてるでしょ（=ワ=メ）＼厚かまし  
い」

「ルー、良かつたねー 今度はわたしがお留守番するからどこか遊びに行つておいでのよー（。。\*）」

「…あ、ありがとうですわ……」

「ルー、顔赤いわよ（・ー・）＼クス」

「… 気のせいですわー ゆ、夕陽のせいですわよー!ー!」

「はこはこ（=ワ=メ） 。〇（もう、シンナレさんなんだから  
）

た、「飯が冷めない内に食べましょー」

> . 1 1 8 1 5 8 | 1 4 5 8 <

…本当に困った姉達ばかりだけど、やつぱり嫌いにはなれません  
の。

明日も何事もなく、みんなにとひとよこ一日になつまなかつよ。

## ルフェルトナの日課（後書き）

<『物理魔女の記録』より転載>  
Copyright © 2010 L&K Logic  
Korea Co., Ltd. All Rights Reserved.  
License to GameOn Co., Ltd.

歌のスパイズ（前書き）

四姉妹のある日の食卓。

## 歌のスパイク。

職業は数あれど、リトルウイッチの特徴と言えば「」の一点に凝る。

”歌”。

時に味方を鼓舞し、時に味方を助けるそれは、ウイザード達の使用する魔法ともビショップが与える神の加護とも一線を画する。彼女達は時として異端者と見られる事もあるが、その歌声を純粋に愛でる者も少なくはなかった。

「るんるんー　ひ～ら～」

古都ブルンネンシユティグの一軒家から、今日も何處か呑気な鼻歌が聞こえてくる。

歌詞もなく、ただ思いつくままに音を口に乗せただけのそれは、それぞれの家路につく人達の足を僅かに留める。

しばしその歌に耳を傾けた人々はやがて疲れた表情を和らげ、その足取りを気持ち軽くしていた。

心から楽しげなその歌声は、特に魔力など込められてはいないのに、人の心を和ませる力を秘めているのだ。

それはその家にある四姉妹が暮らすようになつてから日常茶飯事の事。中にはその歌声を聞く為に、わざわざ遠回りをして帰つている者さえいる。

近所の人々も特に口にはせずとも、その歌声が聞こえてくるのを密かに楽しみにしていた。

もつともそんな事が家の外で起こっているなど、当の歌声の持ち主とその家族は知る由もなかつたのだが。

+ + +

「 るいりーりー … うと、よーし出来た!! ルー、お皿持つて  
きてー(・ワ・)」

華麗にフライパンの中身を返し、サナティーラが声をかける。  
今日のメインディッシュは野菜いっぱいのオープンオムレツ。ス  
ープはそれに合わせてトマトであつさりと。

「ちょっとお待ち下さいな、今持つて行きますから!」

台所の隅の棚から皿を選んでいたルフェルトナが、少し焦ったよ  
うに返事をする。

普段は家族の誰かが何処かに出かけている事が多く、全員が揃つ  
て夕食を囲むのは久し振りだ。

全員で一つの皿をつつくという事も滅多にない為、丁度良さそう  
な大きさの皿が棚の奥に仕舞いこまれていて、出すのに四苦八苦し  
ているらしい。

「おーなーかーすーいーたー」

やはり焼き出す前に皿を出しておけば良かったかとサナティーラ  
が思つていると、早くも食卓についているライトルードがフォーケ  
を片手にまだかと急かす。

「だったら少しば手伝いなさいよ。こつも座つて待つてるだけじゃ  
ないの! (=ワ=メ)」

末の妹ですら率先して手伝つてこるというのに、と眉を吊り上げ  
るサナティーラに、ライトルードはとんでもないとばかりに反論す  
る。

「そんな事はない。サナがいない時はちゃんと作るし……」

「えつ!? ルイ…あんた料理なんて作れたの……?」

四姉妹の中で一番料理が上手なのはサナティーラだ。結果的にサ  
ナティーラがいる時は台所に立つのはもっぱら彼女である。

それ故にか、サナティーラは自分のすぐ下の妹の料理を一度も拌

「なんだ事がなかつた。

「わたしはやればできる子よ（・ー・+）」  
自信ありげに微笑んで見せるルイトルードに、サナティーラは自分

の認識を改めざるを得なかつた。

（てつきり料理が出来ないと思つてたのに…！…）

狩りにおいては四姉妹の誰より高い効率を叩き出すが、通常時は我が道を行くマイペースさで家庭的とは言い難い そう、思い続けていたというのに。

今になつて知る事実に目を丸くしていると、ようやく皿を出せたルフェルトナが神妙な顔で首を横に振つた。

「サナ…ルイの料理は一種の芸術ですわ」

「へ？」

言葉の意味を図りかね、サナティーラが首を傾げていると、そこに外へパンを買いに行つていたチエナが帰つてきた。

「たつだいまー！ あつ、今日はオムレツなの！？ 美味しそーうゞ（。。\*）ノ」

「お帰り、チエナ。パンは買えた？」

「あ、うん！ お店が閉まる前だつたから安くしてもらえたよ  
山葵一、こつちにパン持つてきてー！」

チエナが玄関先に声をかけると、そこから紙袋を抱えたモンスターがのそのそと入つてくる。

ゴートマンという種族のモンスターだが、チエナに調練されてモンスターとしての狂暴性はない。『山葵』といふ名を『えられ、今ではすっかり家族の一員だ。

「山葵、ありがとね（^ワ^）」

袋を受け取り、サナティーラが礼を言つと山葵は嬉しそうに頷く。ごつい鎌を持つてゐるし見た目も怖いが、見慣れると可愛く見えてくるから不思議である。

「さて、全員揃つたし… つて、ルー、さつきの続きだけど『芸術』つて何よ？」

「なになに？ 何の話ー？（。。＊）」

「ルイの料理が『芸術』という話ですか……」

何処か疲れたようなルフェルトナの説明に、思い当たる事があるのか、チエナがぽんと手を打った。

「あー…、確かにあれは一種の芸術だね！」

「それってまさか：芸術的に美しいって事？」

> 122908 | 1458 <

『芸術』という表現からはそれしか思いつけず、今までルイトルドに芸術的感性があると感じた事のないサンティーラは心底混乱した。

混乱しつつもオムレツの盛り付けは忘れない辺り、すっかり主婦である。

「ふつ、それほどでも」

「いや、褒めてないよ？」 ですわ

早速つまみ食いをしながらルイトルドが鼻先で笑う横で、チエナとルフェルトナは同時に否定の声をあげた。

「ルイちゃんのご飯つて、見た目と違う味がするのー（。。）」「芸術と一緒にですわ。『わかる人にしかわからない』、不味くはないのですが…その、一般人には理解しがたい味わいと申しますか…」

「そ、そう……」

過去に口にした事があるらしい妹一人の説明に、サンティーラはそれ以上追求する事を諦めた。そして以前からもしゃと思っていた事が、事実である可能性が高いと確信する。

サンティーラも最初から料理が得意だった訳でもなく、最初は焼きすぎたり少し焦がしてしまったりという失敗もあった。

それを今までルイトルドは全部文句一つ言わずに完食したばかりか、『美味しい』と言っていた事を思い出す。今までてっきり、

ルイトルードなりに気を使つてゐるのだと思つてゐたのだが。

(やつぱりルイは味オンチ……！？)

事実関係は不明だが、事実なら四姉妹の食卓において非常に由々しき事態と言えた。サナティーラも家計を担つ稼ぎ手の一人だ。常に家にいるとは限らない。

これは下二人の為にも早急になんとかしなければと心に誓つた長女だった。

+ + +

「サナちゃんの」飯は美味しい」

幸せそうにオムレツを口に運びつつ、チエナが言つのにルフェルトナも不思議そうに同調する。

「オムレツならわたくしでも作れますけど……何が違うのでしょうか？」人並みは料理が出来ると思つてはいるが、そこまで褒められる腕前を持つてはいるとは思つていらないサナティーラは照れ隠しも含めて否定した。

「普通のオムレツだから！ 二人とも、そんなに褒めたつて何も出ないからね！」

「だつて美味しいんだもーん（。。\*） ねつ、山葵」

チエナの隣でご相伴にあずかつて居る山葵もこくつと頷いて同意を示す。

これは余程自分がいない時の食生活がひどいのかと心配になつた所に、現在味オンチの嫌疑をかけられているルイトルードがぼそりと呟いた。

「… 歌

「え？ 歌？」

「そう、作る時いつも歌つてるでしょ（・ー・）」

ルイトルードの言葉にサナティーラは今までを思い返してみた。

「歌つてこうほどのものじゃないけど…まあ、歌つてるわね。それ

がどうしたのよ?」

リトルウイッチにとつて、『歌』は身近にあるものだ。狩りの場においても歌つている事もあり、気付くと無意識に歌つている事も多い。

「多分、そのせい」

「は?」

思いもしない指摘に、サナティーラだけでなくチョナもルフェルトナも皿を丸くする。

「歌のせいつて申しましても…リトルウイッチの歌に料理を美味しくする効果まであるなんて初耳でしてよ?」

「サンちゃんが歌つてるとこっちも楽しくはなるけどねー」

「サンの腕前以外に理由があるなら、それしかないと思つだけ(・。)」モグモグ

そんなはずはないだろ?とこつ反論に、ルイトルードは淡々と答える。

その一方で手は休まず動いており、気付くとオムレツの三分の一が早くもルイトルードの胃に消えている事に他の三人はまだ気付いていない。

「サンの事だもの。作る時はパーティで歌う時みたいに気持ちを込めてるでしょ」

「まあ…気持ちというか、『美味しい出来ますように』と思ひながら作りはするけど。でもそれって誰でもそうじゃないの? (・ワ・; )」

「少なくともわたしは『食べられるものが出来ればいい』としか思つてないわよ(・。・。)」

「……」

「……」

「……そ、そつ」

ある意味潔い答えに、他の三人は心の内で頭を抱えた。

「それに、サンの料理は母さんの味に近いから」

「……」

「あ、そつかあ！」

「え、そうなの？（・ワ・・）」

今度の表現は作り手以外にとつて納得の行くものだつたらしい。今では生きているのか死んでいるのかすら定かではない両親。家族揃つて生活していた時期はとても短い。

もう一度全員揃つて食卓を囲む日が来るのか その可能性はとても低いに違ひないけれども、姉妹の誰もがそんな日が訪れる事を願つてゐる。

何しろ世界各地でバラバラに預けられた自分達がこうして再会して一緒に暮らしてゐるのだ。世界の何処かで生きているのなら、決して不可能な夢ではないだらう。

「ルイちゃんつて、サナちゃんの事本当によく見てるよねー（。＊）」

感心した様子のチョナに、ルイトルードは珍しく照れたような表情を見せる。

「ふふ…、まあね（・ー・ーー）」

「いや、そこでなんで頬染めるのよあんたは？」

（サナもサナで、どうしてルイが重度のシスコンだと氣付かないんですの……）

おそらくそれは、ルイトルードの愛情表現が斜め上を行きすぎているせいなのだろうが、面倒だったのでルフェルトナは説明するのを投げた。

それどころではない事態に気付いたからもあるが。

「 つて、ルイ！ 自分ばっかり食べないで下さいませ！！」

「ほえ？ …ああああー？ オムレツがもうこんなにちよつぴりーー！」

ようやくオムレツの減り具合に気付いた下一人の悲鳴に、当の本人は相変わらずのマイペースで答える。

「食べないからこりないのかと思つて（・ー・）」

「そんな訳ないでしょーーー? ルイはもうセレーヌまでーーー(、ワ、;)」  
「食べ過ぎーーー!」

( ( (まさか最初から狙つて『歌』の話題を……?) ) )

「(ひ)つ見えて意外と知能犯だつたりする次女に、他の姉妹はそんな疑惑を抱いたが、すぐにその疑惑を横に置き、残り僅かなオムレツを等分する作業に取り掛かつた。

結局、サンティーラの料理が特別美味しい理由が、本当に『歌』にあるのかは謎のままである。

歌のスパイズ（後書き）

Copyright © 2011 L&K Logic  
Korea Co., Ltd.  
All Rights Reserved.  
License to GameOn Co., Ltd.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6498p/>

物理魔女の記録

2011年4月28日21時40分発行